

『太平記秘伝理尽鈔』研究』補遺稿

今 井 正之助

はじめに

標題に掲げた拙著（汲古書院、二〇一二）刊行後に得た知見をまとめておく。

◇桜井書（四五九頁。拙著頁数。以下同）

桜井書の版本は、（１）無匡郭九行本と（２）有匡郭一三行本とに分かたれる。（２）はさらに（２１）天和二年（一六八二）本九左衛門刊（外題「新版／楠桜井書 全」。刊記「天和二壬戌年七月日 大伝馬三町目 山本九左衛門版」。見返に桜井宿正成父子図一面あり）と（２２）以下に分かたれる。後者は外題を「楠公桜井書」とし、見返しの図を欠く。後者（２３）と（２４）との間に、今回披見した蓮池鍋島家文庫本（蓮391/275）を新たに立項する。

布目地丁字横刷毛目表紙（この表紙は（２４）と同じ）。25.8×18.0cm。題簽「楠公桜井書」。見返の右横半分弱を枠で囲い、広告を載せ、枠外左側に「京都三条通柳馬場東角書林 堺屋仁兵衛板元」と記す。刊記「天和二壬戌年七月日」（19ウ）・奥付「天和四季癸巳初穠新鐫／三条通柳馬場東角／皇都書林 尚書堂 堺屋仁兵衛」（後表紙見返。右半分に広告あり）。「新鐫」とあるが、（２１）以来の板木を踏襲しており、天和二年刊天保四年印本である。

◇楠判官兵庫記（四九九頁）

富田林高校菊水文庫第五四九号「楠流軍術文武卷」（紙綴り綴、共紙表紙）は、末尾に「明暦元年 未五月日」とあり、兵庫記版本の写しである。冒頭は「文武乃事」から始まる。

◇楠知命鈔（五一九頁）

山口大学図書館棲息堂文庫蔵本（徳山毛利家旧蔵）。原裝紺表紙26.5×18.4cm。五針袋綴六卷六冊。題簽「楠知命鈔一（一六）」。刊記「延宝八年^{甲庚}三月吉日 飯田氏正勝／中村市右衛門」。本書と同じく六冊の八戸市立図書館本、宮内庁書陵部本のうち、書陵部本は前二本に比し匡郭の欠損多く、後刷。八戸本の外題は後補題簽に墨書したもの。

◇南木武経（五一九頁）

未調査としていた版本「富校菊水（三部）」を披見した。そのうち二部は（乙2）に属するが、第二七〇号五卷五冊は新たに知りえた版種。卷一〜四の版面は（乙2）にほぼ同じであるが、卷一の総目録三丁を欠くところから新たに立項し、（乙3）とした。卷五は拙著の（甲）卷五に近いが、後述のような相違があり、（甲）を（甲1）とし、菊水文庫本の卷五を（甲2）に類別した。また、（甲1）の刊記は「天和元年十月吉辰」であるところを、拙著では「十月」を誤脱していた。

さらに、国文学研究資料館「日本古典資料調査データベース」により、白杵市立白杵図書館蔵本を拙著の（戊3）と（戊4）との間に位置する資料と判断した。白杵図書館本を新たな（戊4）とし、以下、（戊4〜6）を順に（戊5）（戊6）（戊7）に繰り下げる。（下記■印は新たに立項したものの傍線

部は追加変更箇所

（甲1）天和元年（一六八一）刊（刊記「天和元年十月吉辰」）

■（甲2）天和元年（一六八一）刊後印（刊記「天和元年十月吉辰」）

：富高菊水第二七〇号◎（五冊の内、卷五）

※表紙灰色（もとは黒色表紙であったか）。後表紙は紺色の後補。甲2は甲1と同じ板木を用いていると思われるが、甲1の卷五卷末には、楠系図（第19丁オ・ウ）および跋文（「終」丁表から裏三行目まで。末尾「：延宝九辛酉／五月日又顕直常書焉」）があり、「五月日又顕直常書焉」から少し間を空けて、中央部分に「天和元年十月吉辰」の刊年が記されている。一方、甲2は楠系図・跋文を欠き、後表紙見返し「天和元年十月吉辰」（四周单边）は、ちょうど、甲1の終丁裏の跋文三行を削除した位置に、よく似た字体（同一ではない。「辰」字など）で配置されている。甲1の終丁裏を版下として、跋文部分を除外して後表紙見返しを作成したのであり、甲2の実際の刊行は天和元年を下るであろう。

柱刻

甲1

跋文三行

天和元年十月吉辰

甲2

天和元年十月吉辰

(終丁裏)

(後表紙見返)

(乙1)元禄九年(二六九六)以前、錢屋儀兵衛刊(所在不明)

(乙2)元禄一一(二六九八)年頃印(刊年不記。刊記「油

小路通五条下ル町/丁字屋田口仁兵衛刊行)

…大谷大◎(五冊)・富高菊水第七五八号◎(五冊)。

表紙、浅缥色檀紙。書き題簽。富高菊水第三号

◎(合一冊。新補表紙)・大洲矢野◎(巻一、

二三、四五の三分冊)・久留米◎(三冊)。蓮池鍋

島(蓮991/384)。他の写本と合綴一冊。南木武経

は巻一・四・五のみ存。

■(乙3)刊年不明。

…富高菊水第二七〇号◎(五冊の内、巻一〜四)

※表紙色はやや赤みを帯びた灰色。巻二後表紙

は紺色の補配されたものであるが、巻三、四

には刷題簽の一部が残っており(乙2大谷大

本と同じ「木」の字が確認できる)、原装と

思われる。乙2との先後は不明確であるが、
類別変更の混乱を避けるため、追加類別の乙
3とした。

(丙)宝曆(一七五二〜一七六二)頃刊(?)…(存否不明)

(丁1)安永二年(一七七三)刊(刊記「安永二癸巳年三月

再刻/京寺町通二条下 伊勢屋源兵衛)

(丁2)安永二年刊安永三年印(刊記「安永二癸巳年三月再

刻/安永三年午九月吉日 京間之町通竹屋町下ル町

太田庄兵衛求板)

(戊1)寛政二二年(一八〇〇)刊(早大本を除いて五分冊。

「安永二癸巳歳三月/寛政十二庚申歳八月求版/皇

都書林 御幸町御池下ル町 菱屋孫兵衛/衣棚二条

下ル町 西村吉兵衛」。表紙はいずれも薄缥色。二

種類の花と鳳凰(?)の花形文を斜め格子状に配し

た型押し)

…京大◎・大阪府石崎◎・架蔵◎・早大◎(巻一、

二の一冊存)。蓮池鍋島◎(蓮991/385)。

(戊2)寛政二二年刊文政元年(二八一八)印(戊1)刊記。

後表紙見返し「杜騙新書」等7点書目広告。その左

側に「文政元年戊寅初冬/皇都書林 御幸町御池下

ル町 菱屋孫兵衛」とある)

(戊3)寛政二二年刊某年印(戊1)刊記から「衣棚二条

下ル町 西村吉兵衛」削除。後表紙見返しは(戊2)

(同じ)

■(戊4)寛政一二年刊弘化三年(一八四六)印(戊3)刊記。

「杜騙新書」等一二点書目広告あり、「弘化三年丙午初夏／皇都書林 御幸町御池下ル町 菱屋孫兵衛」とある)：白杵

(戊5)寛政一二年刊天保頃印(戊3)刊記。後表紙見返

し上中央「書肆」、下右から「江戸芝神明前 岡田屋嘉七／大坂心齋橋北久太郎町 河内屋喜兵衛／同心齋橋博勞町角 河内屋茂兵衛／同心齋橋安土町 河内屋和助／同心齋橋北久宝寺町 敦賀屋彦七／京御幸町御池南 菱屋孫兵衛」

：大阪市◎(五冊)

※旧稿に「刊記と後表紙見返しとの間に「皇都

書肆五車楼藏版略書目(京御幸町／御池下ル)

菱屋孫兵衛(全一〇丁あり。その中に「同(十八

史略)天保再板 七冊」「分見改正京絵図

天保再版 二冊」とあり、本書は天保年間以

降の刊行」と記したが、白杵図書館本の存在

により、弘化四年以降とみなされよう。

(戊6)寛政一二年刊某年印(刊記・後表紙見返しは(戊5)

に同じ)

(戊7)寛政一二年刊某年印(戊3)刊記。後表紙見返し

白紙)

◇付、聖学真浄鏡せいがくしんじやうきやう

九州大学附属図書館雅俗文庫蔵刊本五冊を披見した。その奥付に次のようにある。* (へ)内双行

南木武経(楠家之書／安藤先生和訳)

聖学真浄鏡 安藤先生述

安永九年庚子二月吉日

二条通室町西江入町

京都書林 伊勢屋源兵衛

内容は、卷之一徳行之類、卷之二弁惑論、卷之三弁惑論、卷之四順逆論、卷之五弁惑論附警戒。その巻五にいう。

道ヲ知りタル人ノ軍法ハ仁義ヲ以テ本トシ、智謀ヲ恃ン

デ道ナキニ不レ従。(中略)日本ノ楠等モ戰場ニ於テ其

変通ノ機転アルノミヲ良将トハ云ハズ。

この一節などは南木武経に通じるといえる。しかし、「愚

モ壮年ノ比ハ故郷美作ニアリシガ」(巻二12才)、「タゞ医術

ノ暇ニハ神明ノ道ヲ以テ真直ヲ立ン事ヲ思フ而已」(巻三一

ウ)とあり、讃岐の生まれであった(南木物業、玄理斎序)

という月海こと安藤掃雲軒の経歴と合わない(医術のことも

みえない)。本書の安藤先生は月海とは別人であろう。

◇楠家伝七巻書(五二四頁)

未見としていた弘化三年(一八四六)印本を確認した。蓮

池鍋鳥家文庫蔵本（蓮 991/259）である。色布布目地に雲文
艶出表紙 26.0 × 18.7 cm。巻一 / 二・三 / 四・五 / 六 / 七の五
分冊。見返白紙。他本にもある天和二年杉生・小河の刊記に
加え、後表紙見返に「算学提要 全一冊」他八点の広告の後
「弘化三年丙午正月吉日 / 浪華書肆心齋橋通唐物町河内屋太
助」とあり。本書は、天和二年後印五冊本（ロ一）河内屋太
助版（出版年不記、製本目録を載せるのみ）に先行する。

蓮池鍋鳥家文庫には、巻一と七の合一冊（蓮 991/259）も
ある。薄藍色布目地表紙 25.0 × 18.0 cm。左肩楮紙題簽に「楠
家伝七卷書 * 睽」と墨書。* 部分に「藤家 / 印信」の朱陰
刻の小印。巻頭には「芙蓉 / 館 / 蔵書」印あり。当該文庫の
目録には「晝霞楼叢書第37冊」とあり、蓮池藩第八代直興（在
位 1816 ~ 1825）の蔵書のものである。晝霞楼叢書と注記の
ある版本には、他にも頭・尾合綴のものがある。版種は確定
しがたいが、版面欠損は少ない。

山口大学棲息堂文庫蔵本を、天和二年刊後印五冊本（イ一）
としていた。米沢本と表紙文様は異なる（ともに赤茶色地。
米沢本は亀甲紋艶出、山口本は小葵艶出か）が、後表紙見返
にある刊記等米沢本と同じであり、（イ二）に訂正する。

◇南木惣要（五二六頁）

山口大学図書館棲息堂文庫蔵写本、版本を披見した。写本
九卷三冊は字配り、字体も類似しており、版本の写しと思わ

れる。版本は九卷九冊。袋綴、薄縹色無地表紙 25.7 × 17.6 cm。
子持梓題簽「南木惣要一（〜九）」。見返共紙。四周単辺 19.4
× 13.0 cm。半葉八行漢字片仮名交じり。構成は「元禄二己巳
年十月月日洛陽北山隠士玄理齋敬書」、「元禄四年歳在辛未臘
月穀旦黄檗末流沙門石泉澄謹序」、総目録、本文、跋文。刊
記「元禄十二己卯歳 / 五月吉日 / 浪華書林糸多久兵衛」。「徳
藩 / 蔵書」印他があり、徳山毛利家旧蔵書。

若尾政希・小川和也「翻刻 香川県歴史博物館蔵「南木惣
要」」（深谷克己編科研究報告書『藩世界の意識と権威・西日
本地域の場合』所収。二〇〇四・五）および若尾「軍書を携
えし者たち―安藤掃雲軒の場合」（江戸文学 39、二〇〇八・
一一。上記翻刻の「解説」を改稿）があり、版本に先立つ写
本（高松松平家旧蔵）を紹介している。上記翻刻により（稿
者は未見。仮に香川本と呼ぶ）、版本との異同を摘記しておく。
○玄理齋序と石泉序の位置を異にする。香川本は巻第一の初
めに置く（版本の形が自然）。

○巻一〜八は、大きな違いはないが、版本は香川本にある小
字注記部分を欠くことがある。

○巻九は、版本は香川本にある条目をいくつか欠く。

・ 版本 6ウ相当箇所に、著者月海（安藤掃雲軒）が幼きか
らの行跡を顧みる記事あり。版本にも類同の記事があり、
重複とみなし、削除したか。

・ 版本 19才相当に、長文の「三種ノ神器ノ事」あり。22才

相当「大神宮トイヘハ：天人一ナリ」、23ウ相当「他婦
依ト云。：勇ニ中ル理トス」共々、神道関係記事の削除。

・ 版本24才相当「仏典西方ノ引導：分別ノ本ナリ」、25才
ウ「祖師偽テ：万行皆違フ」他、仏法関係記事の削除。

○ 香川本には、著者が郷里の讃州に帰り、「国子君」(若尾は
松平頼常かという)の求めに応じてこの書を奉った旨の、
元禄四年(一六九二)の自跋がある。版本には無く、代わ
りに以下の跋文がある(跋文の丁裏に上述刊記あり)。

南木武経有二卷書一残レ之畢記。則此書也。猶又三ヶ
有ニ秘訣。此目錄之外也。若深有ニ執心徒。則以ニ神文ニ
可レ伝ニ授之ニ者也。(句読点は今井)

香川本から版本への改編はなお検討すべきであるが、本書
と南木武経との関係に移る。版本跋文にいうように、南木武
経跋文末尾に「又予心謀有ニ二卷書一残レ焉畢矣。他時異日若
有ニ執心之徒。則以ニ誓約ニ可レ授ニ与之ニ者也。延宝九辛酉五
月日又踵直常書焉」とある(戊類本は「文顯」)。直常は安
藤掃雲軒の俗名か)。これによれば、南木惣要も延宝九年
(一六八一)以前に成立していたことになる。南木惣要には「南
木武経ニ性理ノ沙汰少々拳キ」(巻一)、「南木武経ニ少々記ス」
(巻二)等の記載があるから、南木武経が先行するとみなさ
れるが、両書はあまり時をおかず成ったものか。惣要版本跋
文にいう「三ヶ秘訣」が何をさすのかは不明であるが(*)、
惣要と武経とは深い繋がりがあり、武経の和(安藤掃雲軒の

注解部分)を参観することにより、惣要の特質が鮮明になる。

(*)『擁膝草廬藏書目録』(運籌堂藏書目録、平山兵原藏
書目、平山氏藏書目とも)に「南木武経極秘」が見
える。

南木惣要は以下の構成をとる。(内は総目録に示す細
目であり、本文中に章立ては無い。

巻第一法部之法(自敵ヲ亡スノ論、士農工商起本ノ事、
井田経界ノ事)、巻第二法部之配(庠序学校ノ事)、巻第
三法部之術(学文小大内外一致ノ論)、巻第四配部之法、城
取小屋取行烈備ノ事、軍法常ナルノ事、王城ノ図、太宗
論ノ事、戰場出行ノ尅法度ノ事)、巻第五配部之配(孫
子五言ノ事、八陣ノ事、備人積ノ事、備ノ事)、巻第六
配部之術(八陣分数ノ事并馬印、虚実ヲ知ル事、行軍ノ
事)、巻第七術部之法(知仁勇ノ事、金鼓鈴旗貝狼煙夜
ノ相図ノ事、鍵ノ事、続松ノ事、地雷ノ事、霧ノ印ノ事、
川渡ノ事、楯ノ事、水中透ノ事、小屋取ノ事)、巻第八
術部之配(夜戦ノ事、出行ノ事、軍役ノ事、玉薬兵粮積
ノ事)、巻第九術部之術(回徳ノ事、神儒仏勝劣ノ事、
三徳三法三身ノ事、三帰依ノ事、三法一如天徳ノ事)
こうした内容につき、或人が次のように問うたという。

或人、予二問テ曰、此書ハ兵書ナルヲ井田ヲ本トシ、次
二問巷ノ学ヲ記シ、次ニ学文小大ノ迷ヒヲアカシ、次ニ
軍旅ノ事ヲ記シ、終リニ乱ヲ引結テ、王道ニ返シ、神儒

仏ノ三法ヲ一ニシテ天ニ至ルトノタマフコト何ノ云ゾヤ。

古今兵人ノ書記、如斯沙汰ヲ未^ツ聞^カ。…(惣要版本20ウ)

或人がいぶかるように、本書は兵書としては変わり種である。むしろ大局的には、「兵学の道徳学化・政治学化を進めた」(前田勉『兵学と朱子学・蘭学・国学』五三頁。初出一九九九・九)という近世兵学の動向と重なるものである。しかし、兵書に直接、井田や学校、学問論を持ち込むことは例をみないだろう。これらは、南木武経巻一「備之事」「和シテ曰」に「我ハ孟子ヲ師トス」とあるように、「孟子」(滕文公篇など)をふまえている。

著者は或人の問いに、次のように答える。

文ノ外ニ武ノ法ナシ。然ルニ文武ハ車ノ両輪ノ如ク、鳥ノ両翼ノゴトシ。積善積悪ニ依^レ、因果ノ二法ハ明々タレドモ、愚人ノ可ナリ。武ハ文ノ權ト云ハ可也。(21ウ)

※波線部を香川本は「…如シト云ハ非ナリ。文ヲ本トシ、武ヲ末ト云ハ可ナリ。」とする。版本は文意不通。

同様の文辞は、南木武経巻四「船軍之事」の和にも「武ハ文ヨリ出^ル。文ノ外ニ武ナシ」とある。

本書の生成には、南木武経巻二末尾の記述が注意される。

予(著者)が若年の昔、「前越ノ老師井原先生」(井原頼文。石岡久夫『日本兵法史』上、一七〇頁以下)に問うたところ、井原は「法二三段アリ。法ノ法、法ノ配、法ノ術。配部モ三ダン、術武モ三タン。…予(井原)ガ兵法オツル所、孔孟伝

授ノ心法ナリ」と答えたという。南木惣要の九段の構成は、

井原に学んだものということになる。ただし、井原の「孔孟伝授ノ心法」と安藤掃軒雲の「孟子ヲ師トス」とが同一とは限らない。孔孟からさらに孟子を前面に押し出したところに、井田法や庠序学校などを兵書に大きく組み込むことになったという可能性も考えられる。前記若尾論文も注意するように、南木武経巻四「船軍之事」の「和シテ曰」には、「義経、聖門ニ入ラズ。仁義ノ経ヲ知ズトイエドモ軍ハ勝テ上手ノ由、正成、郎徒ニモ常ハ語レリ」とある。掃雲軒が義経と正成の差異を強調するのも、我が兵学を義経流から脱却したものと自認しているためかもしれない。しかし、結局は

(南木惣要に) 影響した義経流の検討は、義経流兵書の出現を始めて始めて可能なことであり、未見の現段階においては遺憾ながら論証することができない。(一七三頁)

と石岡がいうとおりであろう。

さて、南木惣要を拙著で「南木流兵書版本」の中に位置づけたが、南木流とは何か、明示するのは難しい。「南木流は仏法(神道も)に重きを置く立場からの『理尽鈔』批判の書」とらえ、分析していくのが有効と思われる(拙著五五八頁)と述べた。南木武経の、楠三卷書など他の南木流兵書と共通する部分については、右の見通しはまだ有効であると考えられる。ただし、上述してきた孟子に重きを置く、「和」に纏述する

内容や南木惣要のあり方を併せ考えると、今少し緩やかに、『理尽鈔』批判を意識化した兵書群ととらえた方がよいかもしれない。『理尽鈔』との差異化を図った図書には、はやくに『無極鈔』があるわけだが、同書は『理尽鈔』を意識しながらそれを秘している（拙著三九〇頁）。

南木惣要巻第八冒頭近く「出行ノ事」に、撰津国手嶋川原の戦いで新田義貞勢が劣勢に陥ったが、正成が二時遅れて出陣し勝利を得たことをあげて、以下のように記す。

此戦、正成、地形ヲ能知ルト計ニハ非ズ。太平記評判伝記ニハ地形一廻ノ沙汰ノミ也。南木武経ニ委記隠謀有キ。

傍線部は、理尽鈔巻一五に「某ガ分国ニテ侍レバ、当国ノ事案内ヲバ能知リテケリ。…」（50ウ）とあることをさす。南木武経の記事とは、巻五「心通」の一節（和日の武経独自記事では無い）をさす。正成が作成した書状二通を敵からの内通と詐つて、新田等に見せて、軍勢を勇ませ、さらに、偶然立ち上った煙を相図の煙と偽つて鼓舞し、敵の大軍を破つた、という。これが真相であるというのだが、敵の内通を味方に信じ込ませ勝利を得た、という設定は、理尽鈔にもある（巻一〇31才以下。正成の筒井・矢尾との合戦）。南木武経等の「隠謀」はその焼き直しといえよう。南木流が理尽鈔批判をくり広げながら、その実、深く影響を受けていた一例である。

◇ 『楠三卷書』・三版本および類縁書（五三二頁）

拙著で『南木流家伝之三卷』に代表される南木流の諸書を、『上・中・下』の内容構成により分類整理した。五三八頁では『軍教之巻』『軍元立將巻』『三妙無尽法』『軍用秘術聴書』など、『単独で存在する図書』にも言及し、

・楠正成無尽巻 写・山口大棲息（『楠正成』無尽巻）、江戸期写、一冊）

・楠正成流三妙無尽法 写・山口大棲息（江戸期写、一冊）などをその例としたが、披見した結果、訂正する。

前者は、楮紙袋綴一冊、洪刷毛目表紙 23.5×16.5 cm。表紙中央に「無尽巻 全」と打付書。本文七行漢字平仮名交じり。巻区分はしていないが、**上**・**中**・**下**型に属し、八戸市立図書館『楠軍書』、岡山大学池田文庫『南木遺書』に近い。ただし、八戸本、岡山大本の**上**相当部分末尾にある「左大臣橘諸兄公末孫」（拙著記号◇）が正成から「正広 法名広禪」までであるのに対し、本書はそれにかけて「正康 法名禪間」を記す。

後者の『楠正成流三妙無尽法』は、楮紙袋綴一冊、縹色無地表紙 23.5×18.8 cm。左肩楮紙題簽に「楠正成流 全」と墨書。本文九行漢字片仮名交じり。「楠正成流／三妙無尽法」と始めるが、三妙無尽法のみではなく、自悟法の後に正成伝授奥書を記し、**中**の全部を内容とする。

◇南朝軍談（六五〇頁）

…『菊水文庫蔵書目録』にも「南朝太平記 20冊」の他に「南朝軍談 24巻目録とも21冊 享保10」とある。二〇一〇年八月の菊水文庫調査時、南朝軍談の所在は確認できなかったが、これらの記載にしたがえば、『南朝軍談』は『南朝太平記』享保一〇年印本の改題本であり、改題後も宝暦一〇年、寛政年間と何次かにわたって刊行されたことになる。

拙著に右のように記したが、披見の結果、傍線部の判断は誤っていないかと考える。『南朝軍談』としての初刊年は、刊記によれば享保一〇年であるが、『南朝太平記』の刊記を踏襲したものであり、実際の刊行は享保一〇年九月より降るのであろう。

・菊水文庫第一号『南朝太平記』。二四卷二〇冊。縹色無地表紙25.2×18.6cm。外題「日本／諸家／秘説」南朝太平記」。巻一・二才四周単辺21.1×16.0cm。刊記「享保第拾乙巳歳九月吉日／書肆 大坂追手筋錦町菊屋勘四郎／天満九丁目紀伊国屋宇兵衛」
・菊水文庫第八六号『南朝軍談』。前者第一冊の「序」「総目」を分冊とし、二四卷二一冊。縹色無地表紙25.8×18.6cm。外題「楠氏／太平記／実説」南朝軍談」。巻一・二才匡郭内寸21.1×16.0cm。巻一・二才四周単辺21.0×15.9cm。刊記「享保十乙巳歳九月吉日／書肆 大野木

市兵衛

◇湊川物語（六六六頁）

未確認であった菊水文庫第一三〇号を披見した。上冊欠、中冊は縹色無地表紙27.0×18.1cm、刷題簽に「湊川物語 中」と墨書。下冊は薄茶色檀紙地に茶色の菊水紋散らしの表紙26.8×18.4cm、中冊とは別様の刷題簽に「湊川物語 下」と墨書。中京大学蔵本にある「通油町／本問屋開板」の刊記を欠く。以上のように中・下冊は取り合わせ本であるが、ともに「禾舟／珍藏」（朱陽印。他に、「大幼／楠氏文庫」朱陽印、「菊水文庫／大阪富田林中学校」朱陽印。「大幼校図書／第一門／第8部／第188番／楠氏文庫」紫陽印）の印があり、禾舟こと川島右次の旧蔵書であることを確認した。

◇楠公三代記（玉蘭斎貞秀画作。丸屋・小林鏡治郎版。七三三頁）

菊水文庫には三部蔵されており、これを追記する。
第九六号（初編・二編・三編の三冊、水色地菊花型押表紙）は、初編表紙寸法18.0×11.9cm、二編17.9×11.7cm、三編17.9×11.8cm。蔵書印も各冊にある「菊水文庫／大阪府立富田林中学校」の他、初編は「川嶋／之印」（朱陽、川島右次）、二・三編は「大幼 楠氏／文庫」「大幼校図書／第1門／第8部／第538番／楠氏文庫」と異なる。各冊末尾にある「出版書

目」の第二丁裏下段の「一艶孃毒蛇淵 三編大尾」の左、「一
休禪師御一代記 全」から「一西行法師御一代記 全」にお
よぶ五点相当部分、三編のそれは未刻（墨塗り状態）である。
ちなみに、小浜市酒井家文庫蔵本の三編の当該部分は菊水文
庫本の初編・二編と同じく、「一休禪師御一代記 全」以
下の書目が表示されている。以上を勘案すれば、初編と二・
三編のみならず、三冊とも異なる取り合わせ本か。

第一八号（初編）・第七六一号（二編）は、薄縹色布目地
表紙、蔵書印も菊水文庫印のみと共通する。ただし、表紙に
貼付の富田林中学校の蔵書票の日付が初編は「昭和13年6月
10日」、二編は「昭和14年11月10日」、角裂の色が初編は緑色、
二編は紺色と異なる。

第二九七号（初編・二編）は薄縹色布目地表紙、ともに縹
色（退色）角裂。「大幼 楠氏／文庫」・「大幼校図書／第1
門／第2部／第22番／楠氏文庫」印。

◇正成関係教訓書（七九三頁）

山口大学棲息堂文庫蔵「楠正成三ヶ大事并十ヶ条（楠正成
一卷書奥書）」を披見した。楮紙五針袋綴一冊、薄茶色無地
表紙26.2×18.8cm。左肩楮紙題簽に「楠正成三ヶ大事并十ヶ
条」と墨書。本文八行漢字平仮名交じり。

内容構成は、東博本（2）相当から始まり、（3）「石十箇
条は、辞はつくる事あり、理はきはまる事なし。字々容易、

不可下筆。遂段熟読精思して、堅これをまもるべき者也。仍
如件し。」まで。

◇太平記綱目（八二八頁）

『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録 一般資料（和書漢
籍）編』（一九八一年）に「二冊。一一、一三附翼のみ」（鍋
991/2215）と「万屋刊三五冊。四〇巻のうち第一九）
三）三四）三七卷欠」（鍋991/2216）との二部の『太平記
綱目』が収載されている。後者は五帙に収納。『綱目』の構
成はわかりにくいので、下記に示し（加美宏『太平記の受容
と変容』一八二頁に内閣文庫本による揭示あり）、欠けてい
る部分に網掛を施した。上記波線部はやや不正確。前者にあ
る巻一一、巻一三附翼は、後者の欠失部分（◆印）に当ては
まる。同一装订（藍色無地表紙、五針袋綴）であり、本来一
揃いのものである。第2冊後表紙見返に「わきが一代根切葉」
「朔日丸」等と記した広告の小紙片（16.9×12.0cm）が貼付
されており、その左端に「万屋千蔵」とある。目録の「万屋
刊」はこれによるが、刊記ではない。内閣文庫本等と同じ、
後序を巻末に置く無刊記本である。蔵印「弘道／館蔵／書印」
（藩校）、「生涯画筆／兼詩筆」（朱陰刻5.8×3.8cm）。他に「中
山堂」^{所本}「三又」等の黒小印もあり。「生涯画筆／兼詩筆」印
につき、国文学研究資料館の「蔵書印データベース」を検索
すると「蔵書印主 董可亭」を見いだせる。董可亭は「和歌

山県立博物館ニュース」(「桑山玉洲のアトリエ」展のコラム
11回目。学芸員 安永拓世)

<http://kenpakunews.blog120.fc2.com/blog-entry-600.html>

によれば、日本に來船した中国人画家のようである。生没年は未詳であるが、紀州の文人画家・桑山玉洲(1746～1799)の集めた書画の中にその作がある由。ちなみに、山本秀麿「三両吟社と児玉果亭―南宗画における詩画一致―」(上田女子短期大学紀要20、1997/3)によれば、「明治時代における、長野県を代表する南画家」児玉果亭(1841-1913)も「生涯画/筆兼/詩筆」(山本論文35頁に陰影掲出)の印章を用いていた。児玉果亭の印章も鍋島家文庫蔵『太平記綱目』の蔵書印(印主不明)も、それぞれ別個に董可亭の印に倣ったものであろう。

第1帙《9冊》

第1冊：凡例・総目・劍卷、第2冊：序(村田通信)・卷一、
第3冊：卷一附翼上(君臣編上)、第4冊：卷一附翼中(君臣編下)、第5冊：卷一附翼下(冠服編・邦域編)、第6冊：
卷二、第7冊：卷三、第8冊：卷四、第9冊：卷五、

第2帙《8冊》

第10冊：卷六、第11冊：卷七、第12冊：卷八奇、第13冊：
卷八正、第14冊：卷九、第15冊：卷一〇本、第16冊：卷
一〇末、第17冊：卷一一◆、第18冊：卷一二首

第3帙《8冊》

第19冊：卷一二尾、第20冊：卷一三、第21冊：卷一三附翼

〔遺諫篇〕◆、第22冊：卷一四陰、第23冊：卷一四陽、第24

冊：卷一五乾、第25冊：卷一五坤、第26冊：卷一六前、第

27冊：卷一六後

第4帙《6冊》

第28冊：卷一六附翼(南木家訓)、第29冊：卷一七剛、第

30冊：卷一七柔、第31冊：卷一八屈、第32冊：卷一八伸、

第33冊：卷一九、第34冊：卷二〇、第35冊：卷二一否、第

36冊：卷二一泰、第37冊：卷二二、第38冊：卷二三、第39

冊：卷二四宇、第40冊：卷二四宙、第41冊：卷二五、第42

冊：卷二六天、第43冊：卷二六地、第44冊：卷二七、第45

冊：卷二八、第46冊：卷二九、第47冊：卷三〇、第48冊：

卷三一、第49冊：卷三二、第50冊：卷三三上

第5帙《4冊》

第51冊：卷三三下、第52冊：卷三四、第53冊：卷三五雌、

第54冊：卷三五雄、第55冊：卷三六、第56冊：卷三七、

第57冊：卷三八、第58冊：卷三九呂、第59冊：卷三九律、第

60冊：卷四〇・後序(原友軒)

◇忠義士拔書(八三四頁新規追加)

Ⅱ太平記評判書を用いた編著「1、太平記全般に関わるもの
の付1、編著の一部に太平記・理尽鈔を利用したもの」に
以下を追記する。

本書（以下『抜書』）は、堀田正信編著、寛文三（一六六三）成、天和三（一六八三）刊。六卷六冊。菊水文庫第五五七号。

「享保四年己亥年正月大吉祥日／洛陽書林 林五郎兵衛版」の刊記のある『武家忠臣記』は、外題の他、序題・目錄題・内題を「武家忠臣記」と改刻した改題本（板木は同じ）。巻二・三・五・六を本末に分冊、六巻一〇冊（披見した刈谷市中央図書館村上文庫本は第三末、第六本を欠く）。菊水文庫本巻五・六にある尾題を村上文庫本は削除している。菊水文庫本第一冊に二つある序のうち巻頭の序（末尾は「天和二戊孟冬仲流／前正法黃龍山主南頂目書」）も村上文庫本には無い。

本書の存在は寺澤氏に教えていただき、全般的な問題については寺澤氏が考究予定と伺っているので、理尽鈔との関わりに絞るが、佐倉藩主であった堀田正信は、『南木記』（佐倉高校鹿山文庫蔵、写本一〇巻一〇冊。拙著八二六頁）の編纂を命じた堀田正虎の伯父にあたることのみ付言しておく。巻三「楠正成」以下、巻五「菊池入道寂阿。同肥後守武重并武光」までの人物評伝（巻三九項、巻四一八項、巻五二項）に太平記・理尽鈔が用いられている。単純な抜書ではない。正成を例に示す。元亨二年の討幕計画に始まり、正成の召し出し（夢想には触れない）、赤坂城合戦、金剛山籠城（理尽鈔を主に詳述）、兵庫下向命令に対する正成の奏上（太平記巻一六）、坊門清忠糾問、正行への庭訓、恩地らへの指令、湊川討死、家臣育成の様々な手法（理尽鈔巻二三三五才等含む）

といった事項を、1才（半葉一二行漢字片仮名交じり）から11才までに要領よくまとめあげている。

その正成記事の末尾に、次のようにあるのが注意される。

終建武三年五月廿五日、於^テ兵庫湊河^ニ陥^レ命タリ。于^レ時三十五。正季廿五。

理尽鈔は正成とともに討死した弟を「正氏」とするが、本書は太平記に従い「正季」とする。同様に「今年、正成四十三歳、正氏卅二歳也」（巻一六八ウ）という享年も採用しない。本書は理尽鈔を大幅に撰取しているが、太平記の記述を優先しているようである。ただし、太平記は正成・正季の享年を記していない。具原益軒の『和漢名数』（延宝六年（一六七八）刊）に「楠正成（四十二。一説三十五）」とあるが、同書に正季の記載はない。『抜書』は跋文によれば、寛文三年に成っているが、刊行は『和漢名数』より降る。両者の関係は不明であり、別に「三十五」とする資料があるのかもしれないが、『抜書』は学術的な考証をしているわけではなさそうである。

楠正成に続く「楠正行」の冒頭部分に「康永二年、家子郎従ヲ集メ申ケルハ」とある。この年号記載は、正成討死の建武三年に一一歳（太平記巻一六一五一頁。理尽鈔巻一六八ウ）、拳兵の意志を配下に告げた記事に「正行其比十八歳」（理尽鈔二五一九ウ）とあり、康永二年にあたる、と計算したものである。また、「藤房」記事（この記事の典拠は太平記）

の末尾に「建武二年三月十二日遁世。時三十八」とある。「公卿補任」は「(建武元年)十月五日出家三十九」とするが、太平記は、藤房が中先代の乱(建武二年七月)の記事に先立つ「三月十一日」(巻一三・一八頁)の八幡行幸に供奉した後、遁世したと記し、それを「(齡末四十二不足人ノ) (同) と評している。『抜書』の「三十八」は傍線部を具体的な年齢表示にしたもののように思われる。

正成の享年「三十五」も、特別な資料に拠ったのではなく、長男正行一歳との年齢差から案出された可能性を考えておくべきであろう。正季「廿五」歳は、理尽鈔の正成・正氏の年齢差に準じて、一〇歳年下としたものか。

◇楠一代忠壮軍記(八三七頁)

本書につき、菊水文庫「楠公誠忠画伝」は、書き題簽に「共五」とあるが存一冊であり、本書の第一冊に相当する。菊水文庫目録一五頁には「楠公誠忠画伝4巻4冊(巻一欠)十返舎一九作、勝川春亭画(江戸)」とあるが、二〇一〇年夏調査時には所在不明】と記したが、下記のように補訂する。

菊水文庫蔵本(請求記号:幼120-105)は表紙中央に「勝川春亭画 十返舎一九□/楠公誠忠画伝 共五」と書き題簽があるが存一冊であり、本来楠公誠忠画伝 巻二一冊(請求番号:(213) 173)、「楠公誠忠画伝 巻三〜五3冊」(請求記号:幼156-92)と一具のものである。

◇絵本楠一代記(八三九頁)

拙著の記述は東大総合図書館蔵本によったが、新たに披見した菊水文庫第四一〇号(上册)・五四二号(下册)は東大本の後印。東大本の表紙下部には「丑ノ春新版/佐野屋版」とあるが、本書は傍線部を欠く。東大本に「烏有散人作(天保辛丑新鑄/鶴喜原版) / 絵本楠一代記 / 歌川国芳画(芝神明前/喜鶴堂蔵)」とある見返および「天保十二年辛丑孟春新版目録」を載せる後表紙見返のいずれも本書は白紙。尅丁表の序文「天保辛丑春 烏有散人述」の傍線部をも欠く。

◇楠子小伝(八七六頁新規追加)

愛知教育大学蔵写本。薄緑色無地表紙袋綴一冊。中央に「楠子小伝 全」と朱筆打付け書き。内題「楠子小伝」。奥書「寛延己巳二年八月十三日繕書之畢 / 一柳軒還春」。

※内容:『楠氏二先生全書』第一巻に載せる「二先生小伝」および正成賛、正行賛。『太平記』巻一六「正成兄弟討死事」、『太平記大全』巻一六、『本朝歴史略』巻四19ウ〜22オ、広厳宝勝禅寺略縁起、正成手跡之写、水戸光圀の広厳前住千厳宛書簡の写、嗚呼忠臣楠子之墓図・碑背文、三楠実録所収正成・正行・正儀賛、太平記綱目巻四九(太平記卷三二。正儀関係記述)等を収載。

◇太平記恩地陰之卷（九〇二頁）

菊水文庫本二部を新たに披見した。ともに万治元年・松長伊右衛門尉開板。第九三号は縹色地_二上繫に草花唐草艶出表紙、上冊の題簽は新補であるが、中・下冊は原題簽（恩地陰之卷）を留める。同五四八号は、各冊表紙を楮紙で包んで改装。

◇楠流軍練書（九〇三頁新規追加）

菊水文庫第五五〇号。楮紙紙縫り綴写本一冊。本文共紙表紙28.3×20.2cm。「楠流軍練書」と打付書。半葉一二行漢字片仮名交じり。字面高13.5cm。墨付き三三丁。虫損が進み読みづらい箇所多し。

内容・大勇伝授之卷上、大勇伝授之卷下。これに続けて左の奥書あり（訓点は今井）。

往昔兵家之書、不_レ知_二其幾許_一、更卷而難_二懷中_一矣。今此短軸雖_レ不_レ足_二武備_一、知_レ神、知_レ命而、忠義之生死、大勇之心法、武道之開悟也。慎而得_二伝授_一而可_二自得_一也。勇将之服心也。 和田正通在判

和田雪齋正通者我旧識也。京都之乱蒙_レ疵而苦_二步行_一、漸登_二当山_一宿_二我坊_一。其勇猛而武事之達者也。此一巻之小軸秘縑久矣。或時雪齋語_レ予曰「老衰如斯今也、可_レ伝_レ之。無_二親戚_一既是雖_レ非_二僧家之具_一、伝_二授_一之。正是武将之開悟、大勇之密書也。可_レ秘々々。」此故予亦不_レ抛_二擲_一之、慎而密_レ之、俟_二勇将之需_一而已。

天正八年八月日 根来山専式坊

丁を改めて、一和巻、御大将誓約、諸将誓約、横目誓約、使武者誓約、討戦之巻と続く。

丁を改めて、正成の「夢ハ妄想ナリ。…」という教訓が半丁あり、また丁を改めて拔城巻、さらに守城巻が続く。守城巻の末尾には、正成が千破劍城で虹を見て、これは敵の悪気だ、と兵を勇め、尾張守の備を夜討した、との記事あり。

最後は夜軍夜討巻。ここには奥書等なし。

◇楠流秘極教戦記（九〇三頁新規追加）

楮紙袋綴写本二冊。上：菊水文庫第七六号、下：同三五号。縹色地雷文繫に蓮花艶出、その上に金泥で霞・草模様を描く。21.2×15.0cm。金泥霞・草花模様のある題簽に「教戦記上（下）」と墨書。見返し共紙。漢文体半葉一一行。字面高17.0cm。一部に朱の訓点・符号等あり。上冊奥書「寛文二年_卯／臘月吉日 金光主水正友成「花押の上に「寶」字を二重丸で囲った朱印あり」／佐竹河内守殿進献」、下冊奥書「寛文三_辰／三月吉日 金光主水正友成（上冊に同）」／佐竹河内殿進献」。

内題「楠流秘極教戦記」。上冊は軍行之弁、川軍弁、剛屋作法、夜討内試、陰撃拒法、下冊は殿之弁、圍城弁、守凸、武田信玄流要略（攻兎凹戊箇条、丙合戦事）。『増補大改訂 武芸流派大事典』八九三頁、加賀を中心とした陽翁流とは「別系」の「陽翁伝楠流」の項に、金光主水友成が明暦二年五月、佐

竹義隆につかえ、秋田における楠流軍学の初代となった旨、記述がある。寛文三年は義隆の在位中であるが、「河内守」は存疑。傍線のように、武田流信玄流を交えるなど、流派の特性はなお検討を要する。

◇楠公百首軍歌（九〇四頁）

三極紙袋綴写本、一〇巻二冊。菊水文庫第二九九号。藍色地菊唐草模様表紙270×190cm。金箔散らし題簽に「楠公百首軍歌 上（下）」と墨書。内題「楠公百首軍歌」。本文四周に筆記による匡郭あり。近代の写本か。八行漢字片仮名交じり。

印記は『湊川物語』と同様。「大幼／楠氏文庫」「菊水文庫／大阪富田林中学校」「禾舟／珍藏」「大幼校図書／第1門／第8部／第50番／楠氏文庫」。本書も川島右次の旧蔵書。建武元年、名和長俊に指南を請われた正成が「自詠スル所ノ百首ノ軍歌ヲ授テ、一首一日ニ講談」した旨の序あり。巻一〇巻末には「余所得之本、存九十八首而闕二首」云々という奥書（署名、年号など無し）があるが、巻五と巻一〇は八首であり、存九六首。正成の講評は今に伝わらず、本書の注解は跋文の主が古人の言を参酌して成したものである。特徴的と思われる軍歌数首を例示する（注解は略す）。
1 武ノ道ヲ何ト立ルト人云バ仁義ヲ以本体ト社スレ
2 文ト武ト分ラヌヲ社道ト聞学ビヤウニテ邪道トゾ成

23 太公ノ十四ノ変ハ誰モ知ル時ニアタリテ変ノ変ナリ
26 正兵ト奇兵ノ分ヲ能知リテ下知ヲナスコソ明将ノ業
36 山上ヤハヤシ沼沢難所ヲバ鳥雲ノ陣ヲ備ヘテゾヨシ
65 慢心ト無礼ヲゴリニ佞奸ハ臆病者トカネテ知ルベシ
※68・69・70・71も佞人を問題としている。
81 毎^じ迎^{むか}モ忘レマジキハ君ノ恩サテハ後ノ名天ニアル運

付記

二〇一四年八月、大阪府立富田林高校常勤講師の寺沢光世氏から、同校同窓会蔵菊水文庫の整理が進み、今井が二〇一〇年に未確認とした図書も披見可能になった旨、連絡いただいた。二〇一五年一〇月に再訪を果たし、続いて、九州大学、山口大学、佐賀県立図書館を訪れた。

寺沢光世氏のご厚意に感謝いたします。

閲覧をお許しくださった関係各位に篤く御礼申し上げます。

佐賀県立図書館寄託資料の鍋島家文庫については、所有者である公益財団法人鍋島報効会に原本閲覧調査をお許しいただきました。

佐賀県立図書館蓮池鍋島家文庫蔵の写本については、「佐賀の楠流―堀江甚三郎重治と南木流兵書―」（日本文化論叢24、二〇一六・三）にまとめた。

なお、拙著に架蔵本と記した図書（破損の進んだポー

ル表紙本を除く）は、現在は愛知教育大学附属図書館の所蔵となった。

拙著：誤→正

※他にも補訂を要するもの多いが、誤脱のみ余白を利用してここに訂正しておく。

264P19L：版本の底本はA類→版本の底本はC類

345P7L：政治社会→政治思想

371P：『綱目』→『綱目』

524P 表見出3項目：1オ→序オ、同12・13項目：（結）→（終）

678P11L：軍師して→軍師として

688P 本文2L：製版→整版

730P82 項：（削除。《61》に同じ）

762P2L：富校菊水→富校菊水第三五号

813P13L：第六部第一部→第六部第一章

835P16L：製版→整版

848P11L：卷三九32オ→卷三七32オ 書名索引26P 右列：楠

六一代絵巻 672.837 → 671.837

（いまい・しょうのすけ 本学特別教授）